

デーヴォ ガイド



2023.8.21-27

But **grow** in the grace and knowledge of our Lord and Savior Jesus Christ. To him be glory both now and forever! Amen. II Peter 3:18

L T G ガイド

- ①お互いへの感謝と誉めることを分かち合しましょう。(2~3つ)
- ②1週間の罪を言い表して悔い改め、互いに祈りましょう。
- ③礼拝メッセージの分かち合いをします。
礼拝メッセージの分かち合いが難しい場合はディボーションの分かち合い(なるべく短く)
- ④預言の祈り(主の御心を宣言して祈り)をします。

セル ガイド

- ①祈り、賛美によって主がここにいてくださることを信じ、聖霊様があがめます。
- ②互いの存在を感謝し、尊敬するところを分かち合しましょう。
- ③ディボーションの分かち合いをします。
- ④セルの目的と働きについてみなで共有して、祈り、遣わされて行きましょう。

家族礼拝ガイド

年長のクリスチャンがリードしてください。進め方にはいろいろな意見が出るかもしれませんが、「主に期待する」信仰が最も大切です。いつもの家族でいいのです。

- ①この1週間で神様はすばらしいと感じたのはどんなこと?
- ②この1週間でお互いにどんなことを感謝しますか?(または誉めたいですか?)1つだけ。
- ③聖書のみことばから、どんな実践をして、またどんな恵みがありましたか?
- ④互いの必要のために祈りましょう。

礼拝メッセージフィードバック

<今日の聖書箇所は…>

①神のみこころは?(信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど)

②どんな思いになりましたか?(感情や願いなど)

③生き方にどう適用しますか?(あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか?)

④この世にあって何を実践しますか?



24:24 数日後、フェリクスはユダヤ人である妻ドルシラとともにやって来て、パウロを呼び出し、キリスト・イエスに対する信仰について話を聞いた。

24:25 しかし、パウロが正義と節制と来たるべきさばきについて論じたので、フェリクスは恐ろしくなり、「今は帰ってよい。折を見て、また呼ぶことにする」と言った。

24:26 また同時に、フェリクスにはパウロから金をもらいたい下心があったので、何度もパウロを呼び出して語り合った。

24:27 二年が過ぎ、ポルキウス・フェストゥスがフェリクスの後任になった。しかし、フェリクスはユダヤ人たちの機嫌を取ろうとして、パウロを監禁したままにしておいた。

25:1 フェストゥスは、属州に到着すると、三日後にカイサリアからエルサレムに上った。25:2 すると、祭司長たちとユダヤ人のおもだった者たちが、パウロのことを告訴した。25:3 そして、パウロの件で自分たちに好意を示し、彼をエルサレムに呼び寄せていただきたいと、フェストゥスに懇願した。待ち伏せして、途中でパウロを殺そうとしていたのである。

25:4 しかしフェストゥスは、パウロはカイサリアに監禁されているし、自分も間もなく出発する予定であると答え、

25:5 「その男に何か問題があるなら、おまえたちの中の有力者たちが私と一緒に下って行って、彼を訴えればよい」と言った。

25:6 フェストゥスは、彼らのところから八日か十日ほど滞在しただけで、カイサリアに下り、翌日、裁判の席に着いて、パウロの出廷を命

じた。

25:7 パウロが現れると、エルサレムから下って来たユダヤ人たちは彼を取り囲んで立ち、多くの重い罪状を申し立てた。しかし、それを立証することはできなかった。

25:8 パウロは、「私は、ユダヤ人の律法に対しても、宮に対しても、カエサルに対しても、何の罪も犯してはいません」と弁明した。

25:9 ところが、ユダヤ人たちの機嫌を取ろうとしたフェストゥスは、パウロに向かって、「おまえはエルサレムに上り、そこでこれらの件について、私の前で裁判を受けることを望むか」と尋ねた。

25:10 すると、パウロは言った。「私はカエサルの法廷に立っているのですから、ここで裁判を受けるのが当然です。閣下もよくご存じのとおり、私はユダヤ人たちに何も悪いことをしていません。

25:11 もし私が悪いことをし、死に値する何かをしたのなら、私は死を免れようとは思いません。しかし、この人たちが訴えていることに何の根拠もないとすれば、だれも私を彼らに引き渡すことはできません。私はカエサルに上訴します。」

25:12 そこで、フェストゥスは陪席の者たちと協議したうえで、こう答えた。「おまえはカエサルに上訴したのだから、カエサルのもとに行くことになる。」

下心がありながらも、真理については半信半疑で恐れを抱くというのは、現代人の特徴でもあるでしょう。それでいながら、結局は物欲を選択してしまう人も多いのではないのでしょうか。

パウロはそのようなペリクス、フェストによっ

て人生が翻弄されるのですが、神様の助けは常にありました。パウロ殺害の陰謀は失敗に終わったのです。

主のために何かを選択すると必ずサタンの妨害があるでしょう。気が付かないものもあるかも知れませんが…。それらを主が砕いて、私たちを守ってください。弱い者の小さな働きを助けてくださったという経験は何にも優るものです。パウロをモデルとして何かを選択してみましょう。

パウロを訴えても何の罪も見出させませんでした。神の反対者が訴えを起こしても、クリスチャンが正しい生活をしているなら、本当の真理によって立つことができます。もしもパウロが生活に問題があったなら、ただクリスチャンのだらしなさが指摘され、神の栄光が地にまみれて終わっていたことでしょう。

主のために働く場合は、反対者に訴える口実を与えないようにすることも、必要です。

結局パウロはカイザルに上告しましたが、それによって彼がローマの宣教を計画していることがわかります。つかまって自由がなくなった状態ですが、彼は神様に祈りすばらしい知恵をいただいたのでしょうか。

主のために生きる者には聖霊が働いてくださるので、このように逆転の知恵が与えられるのです。今与えられている事柄をも、主のための目的にシフトを据え変えて、主にささげましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世において何を実践しますか？

25:13 数日たって、アグリッパ王とベルニケが、フェストゥスに敬意を表するためにカイサリアに来た。

25:14 二人がそこに何日も滞在していたので、フェストゥスはパウロの件を王に持ち出して、次のように言った。「フェリクスが囚人として残して行った男が一人います。」

25:15 私がエルサレムに行ったとき、祭司長たちとユダヤ人の長老たちが、その男のことを私に訴え出て、罪に定めるよう求めました。

25:16 そこで、私は彼らにこう答えました。『訴えられている者が、告発する者たちの面前で訴えについて弁明する機会が与えられずに、引き渡されるということは、ローマ人の慣習にはない。』

25:17 それで、訴える者たちがともにこちらに来たので、私は時を移さず、その翌日に裁判の席に着いて、その男を出廷させました。

25:18 告発者たちは立ち上がりましたが、彼について私が予測していたような犯罪についての告発理由は、何一つ申し立てませんでした。

25:19 ただ、彼と言い争っている点は、彼ら自身の宗教に関すること、また死んでしまったイエスという者のことで、そのイエスが生きているとパウロは主張しているのです。

25:20 このような問題をどう取り調べたらよいか、私には見当がつかないので、彼に『エルサレムに行き、そこでこの件について裁判を受けたいか』と尋ねました。

25:21 するとパウロは、皇帝の判決を受けるまで保護してほしいと訴えたので、彼をカエサルのもとに送る時まで保護しておくように

命じました。」

25:22 アグリッパがフェストゥスに「私も、その男の話聞いてみたいものです」と言ったので、フェストゥスは、「では、明日お聞きください」と言った。

25:23 翌日、アグリッパとベルニケは大いに威儀を正して到着し、千人隊長たちや町の有力者たちとともに謁見室に入った。そして、フェストゥスが命じると、パウロが連れて来られた。

25:24 フェストゥスは言った。「アグリッパ王、ならびにご列席の皆さん、この者をご覧ください。多くのユダヤ人たちがみな、エルサレムでもここでも、もはや生かしておくべきではないと叫び、私に訴えてきたのは、この者です。」

25:25 私の理解するところでは、彼は死罪に当たることは何一つしていません。ただ、彼自身が皇帝に上訴したので、私は彼を送ることに決めました。

25:26 ところが、彼について、わが君に書き送るべき確かな事柄が何もありません。それで皆さんの前に、わけてもアグリッパ王、あなたの前に、彼を引き出しました。こうして取り調べることで、何か私が書き送るべきことを得たいのです。

25:27 囚人を送るのに、訴える理由を示さないのは、道理に合わないと思うのです。」

ユダヤの王と総督とが会談して、パウロの処遇について決めようとしていますが、その際に王はパウロの話を知りたいと申し出ます。これはイエスさまの十字架直前の出来事を思い起こさせます。きっとパウロも自分が聞いていたイエス様のことを思っていたでしょう。

私たちが主のために生き、また主のために反対や困難に遭うときは、このように必ずイエス様と同じ扱いを受けている自分に気づくでしょう。そしてそれは私たちの喜びとなるものです。自分の置かれた状況がイエス様のそれと似ていないかと考えてみるのも良いのではないのでしょうか。

ただ違うところは、パウロの場合は皇帝に上訴できる市民権があり、主の守りがあったということです。イエス様には何も守りもありませんでした。私たちは主イエスの苦しみを感じつつも、主の守りを感謝し、勇気を持って進むことができます。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



23日 水曜

使徒

26:1 アグリッパはパウロに向かって、「自分のことを話してよろしい」と言った。そこでパウロは、手を差し出して弁明し始めた。
26:2 「アグリッパ王よ。私がユダヤ人たちに訴えられているすべてのことについて、今日、王様の前で弁明できることを幸いに思います。
26:3 特に、王様はユダヤ人の慣習や問題に精通しておられます。ですから、どうか忍耐をもって、私の申し上げることをお聞きくださるよう、お願いいたします。
26:4 さて、初めから同胞の間で、またエルサレムで過ごしてきた、私の若いころからの生き方は、すべてのユダヤ人が知っています。
26:5 彼らは以前から私を知っているので、証言しようと思えばできますが、私は、私たちの宗教の中で最も厳格な派にしたがって、パリサイ人として生活してきました。
26:6 そして今、神が私たちの父祖たちに与えられた約束に望みを抱いているために、私はここに立って、さばかれています。
26:7 私たちの十二部族は、夜も昼も熱心に神に仕えながら、その約束のものを得たいと望んでいます。王よ。私はこの望みを抱いているために、ユダヤ人から訴えられているのです。
26:8 神が死者をよみがえらせるということを、あなたがたは、なぜ信じがたいこととお考えになるのでしょうか。
26:9 実は私自身も、ナザレ人イエスの名に対して、徹底して反対すべきであると考えていました。
26:10 そして、それをエルサレムで実行しました。祭司長たちから権限を受けた私は、多



くの聖徒たちを牢に閉じ込め、彼らが殺されるときには賛成の票を投じました。

26:11 そして、すべての会堂で、何度も彼らに罰を科し、御名を汚すことばを無理やり言わせ、彼らに対する激しい怒りに燃えて、ついには国外の町々にまで彼らを迫害して行きました。

26:12 このような次第で、私は祭司長たちから権限と委任を受けてダマスコへ向かいましたが、

パウロは弁明を始めました。弁明には証言者となってくれる人が必要ですが、パウロは生活の正しさに関しては多くの証があるので、それに事欠きませんでした。私たちも伝道のためにはそのように、非難されるところのない歩みや人間関係をする必要があります。

しかしまた、パウロは迫害者であることも証しています。もしも過去に問題があるなら、そこから立ち直った証と、それさえも益に変えてくださった神様の大きい恵を大胆に伝えましょう。

またそのような自分の人生を省みて、主に感謝しつつ証しを準備し、それが用いられるようにチャンスを自らつくり、そして主にゆだねつつ話しましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



24日 木曜

使徒

26:13 その途中のこと、王様、真昼に私は天からの光を見ました。それは太陽よりも明るく輝いて、私と私に同行していた者たちの周りを照らしました。

26:14 私たちはみな地に倒れましたが、そのとき私は、ヘブル語で自分に語りかける声を聞きました。『サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげの付いた棒を蹴るのは、あなたには痛い。』

26:15 私が『主よ、あなたはどなたですか』と言うと、主はこう言われました。『わたしは、あなたが迫害しているイエスである。』

26:16 起き上がって自分の足で立ちなさい。わたしがあなたに現れたのは、あなたがわたしを見たことや、わたしがあなたに示そうとしていることについて、あなたを奉仕者、また証人に任命するためである。

26:17 わたしは、あなたをこの民と異邦人の中から救い出し、彼らのところに遣わす。

26:18 それは彼らの目を開いて、闇から光に、サタンの支配から神に立ち返らせ、こうしてわたしを信じる信仰によって、彼らが罪の赦しを得て、聖なるものとされた人々とともに相続にあずかるためである。』

26:19 こういうわけで、アグリッパ王よ、私は天からの幻に背かず、

26:20 ダマスコにいる人々をはじめエルサレムにいる人々に、またユダヤ地方全体に、さらに異邦人にまで、悔い改めて神に立ち返り、悔い改めにふさわしい行いをするようにと宣べ伝えてきました。

26:21 そのために、ユダヤ人たちは私を宮の中で捕らえ、殺そうとしたのです。



26:22 このようにして、私は今日に至るまで神の助けを受けながら、堅く立って、小さい者にも大きい者にも証しをしています。そして、話してきたことは、預言者たちやモーセが後に起こるはずだと語ったことにほかなりません。

26:23 すなわち、キリストが苦しみを受けること、また、死者の中から最初に復活し、この民にも異邦人にも光を宣べ伝えることになることと話したのです。』

「とげのついた棒…」というは当時の慣用語でしょう。「足が棒になった」というように、分かり易くことばを選んだものと思われます。いずれにしても、神を攻撃する者はとげのついた棒をけるようなもので、結局は自分を痛い目にあわせる事になるわけです。

パウロの弁明は異邦人、つまりノンクリスチャンに対するものですが、彼は理解し易いように話しています。神様の御心は全ての人を愛するがゆえのものですから、当然ノンクリスチャンとっても良きものなのです。それを分かるような表現で話すことも必要です。媚びるとか、妥協するのではなく、理解してもらおうのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



25日 金曜

使徒



26:24 パウロがこのように弁明していると、フェストゥスが大声で言った。「パウロよ、おまえは頭がおかしくなっている。博学がおまえを狂わせている。」

26:25 パウロは言った。「フェストゥス閣下、私は頭がおかしくはありません。私は、真実で理にかなったことばを話しています。」

26:26 王様はこれらのことをよくご存じですので、その王様に対して私は率直に申し上げているのです。このことは片隅で起こった出来事ではありませんから、そのうちの一つでも、王様がお気づきにならなかったことはない、と確信しています。

26:27 アグリッパ王よ、王様は預言者たちを信じておられますか。信じておられることと思えます。」

26:28 するとアグリッパはパウロに、「おまえは、わずかな時間で私を説き伏せて、キリスト者にしようとしている」と言った。

26:29 しかし、パウロはこう答えた。「わずかな時間であろうと長い時間であろうと、私が神に願っているのは、あなたばかりでなく今日私の話を聞いておられる方々が、この鎖は別として、みな私のようになったださることです。」

26:30 王と総督とベルニケ、および同席の人々は立ち上がった。

26:31 彼らは退場してから話し合った。「あの人は、死や投獄に値することは何もしていない。」

26:32 また、アグリッパはフェストゥスに、「あの人は、もしカエサルに上訴していなかったら、釈放してもらえたであろうに」と

言った。

パウロのことばがフェストやアグリッパを動揺させていることが分かります。フェストはパウロの博学や論理性を認めざるを得ませんでした。それを認めると自分がその信仰を認めることになってしまいます。アグリッパも同様で、「…わずかなことばで、私をキリスト者にしようとしている。」と言ったほどです。しかし彼らは、始めからキリスト者になろうとは考えてもいませんでした。

このように多くの人々は、論理的に神の存在を認めざるを得ない証拠があったとしても、始めから否定することを決定して話を聞いているので、論理的には行き詰っていても、なお自分を変えようとしません。生命や宇宙法則の存在原因、また普遍的な価値観というものの必要を認めながら、自分の価値基準は相対的で刹那（せつな）的なものを持ち続けるのです。

フェストやアグリッパの態度は概ねノンクリスチャンの普通の姿と言えるでしょう。しかも福音を、上から目線で「聞いてやる」というような態度の人もいたりします。

パウロはそのような2人に対しても、「まじめ」に、「率直に」、そして愛を持って語っています。「…私のようになったださる」というのは、つまり救われて欲しいということです。

パウロの方が博学でまた論理的であったのですが、彼はそれで相手を論破して勝とうとするのではなく、あくまでも謙遜に愛を持って福音の真理を伝えようとしています。その心に聖霊様が働かれるのです。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



26日 土曜

使徒

27:1 さて、私たちが船でイタリアへ行くことが決まったとき、パウロとほかの数人の囚人は、親衛隊のユリウスという百人隊長に引き渡された。

27:2 私たちは、アジアの沿岸の各地に寄港して行く、アドラミテオの船に乗り込んで出発した。テサロニケのマケドニア人アスタルコも同行した。

27:3 翌日、私たちはシドンに入港した。ユリウスはパウロを親切に扱い、友人たちのところへ行って、もてなしを受けることを許した。

27:4 私たちはそこから船出し、向かい風だったので、キプロスの島陰を航行した。

27:5 そしてキリキアとパンフィリアの沖を航行して、リキアのミラに入港した。

27:6 ここで、百人隊長はイタリアへ行くアレクサンドリアの船を見つけて、それに私たちを乗り込ませた。

27:7 何日もの間、船の進みは遅く、やっとのことでクニドの沖まで来たが、風のせいでそれ以上は進めず、サルモネ沖のクレタの島陰を航行した。

27:8 そしてその岸に沿って進みながら、やっとのことで、ラサヤの町に近い「良い港」と呼ばれる場所に着いた。

27:9 かなりの時が経過し、断食の日もすでに過ぎていたため、もはや航海は危険であった。そこでパウロは人々に警告して、

27:10 「皆さん。私の見るところでは、この航海は積荷や船体だけでなく、私たちのいのちにも危害と大きな損失をもたらすでしょう」と言った。

27:11 しかし百人隊長は、パウロの言うこと



よりも、船長や船主のほうを信用した。

27:12 また、この港は冬を過ごすのに適していなかったので、多数の者たちの意見により、ここから船出し、できれば、南西と北西に面しているクレタの港フェニクスに行き、そこで冬を過ごそうということになった。

パウロの願いと祈りの通り、彼は囚人としてはありますがローマへ行けることになりました。人間の基準で考えれば、囚人ですから「伝道などできない。法廷では証などできない。まともに聞いてはもらえない。」と考えそうですが、パウロは違いました。

伝道というのは語る人に力が必要なのではなく、神の力が必要で、その力は状況に限定されないからです。迫害さえもできるほどの有力者であったパウロ自身が、神の力によって回心したように、ローマの人々も神によって変わると確信することができるのです。

航行は困難で前途の多難さを思わせるものでしたが、パウロの思いはローマに向いていたでしょう。イエス様の思いがエルサレムに向いていたように、異邦人の伝道者であるパウロの思いは世界の中心に向いており、そこに彼の希望があったのです。希望があるときにはどんな困難にも負けない力があります。

パウロがローマを神様からの希望としたように、自分にとっての希望を持ちましょう。あなたにとってのローマは何でしょうか。困難に負けない希望を神様からいただきましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満たしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？



27日 日曜

使徒

27:13 さて、穏やかな南風が吹いて来たので、人々は思いどおりになったと考え、錨を上げて、クレタの海岸に沿って航行した。

27:14 ところが、間もなくユーラクロンという暴風が陸から吹き降ろして来た。

27:15 船はそれに巻き込まれて、風に逆らって進むことができず、私たちは流されるままとなった。

27:16 しかし、カウダと呼ばれる小島の陰に入ったので、どうにかしっかりと小舟を引き寄せることができた。

27:17 そして小舟を船に引き上げ、船を補強するために綱で船体を巻いた。また、シルティスの浅瀬に乗り上げるのを恐れて、船具を降ろし、流されるに任せた。

27:18 私たちは暴風に激しく翻弄されていたので、翌日、人々は積荷を捨て始め、

27:19 三日目には、自分たちの手で船具を投げ捨てた。

27:20 太陽も星も見えない日が何日も続き、暴風が激しく吹き荒れたので、私たちが助かる望みも今や完全に絶たれようとしていた。

27:21 長い間、だれも食べていなかったが、そのときパウロは彼らの中に立つて言った。

「皆さん、あなたがたが私の言うことを聞き入れて、クレタから船出しないでしたら、こんな危害や損失を被らなくてすんだのです。

27:22 しかし今、あなたがたに勧めます。元気を出しなさい。あなたがたのうち、いのちを失う人は一人もありません。失われるのは船だけです。

27:23 昨夜、私の主で、私が仕えている神の御使いが私のそばに立って、



27:24 こう言ったのです。『恐れることはありません、パウロよ。あなたは必ずカエサルの前に立ちます。見なさい。神は同船している人たちを、みなあなたに与えておられます。』

27:25 ですから、皆さん、元気を出しなさい。私は神を信じています。私に語られたことは、そのとおりになるのです。

27:26 私たちは必ず、どこかの島に打ち上げられます。』

ユーロクランというのは東北東の風で、激しいものでした。船具まであきらめ、また航海に頼りの太陽や星までもが見えないのなら、全くなすすべがありません。

船乗り達でさえ食事もできないほどに恐れていましたし、パウロも神様から「恐れることはありません」とのことばが必要なほどに、実際は恐れていたようです。

それは神様のご計画の中にあることで、1つには百人隊長がパウロを尊敬するため（後に彼はパウロを助けます）、またひとつにはマルタ島の人々に福音が伝わるためであったと思われます。

このようにパウロは数々の困難に会いながらも、神様がそこから助けてくださるという経験を何度もしているのです。彼のローマ行き確信は強くなっていったのです。

ユーロクランのような激しい出来事で、神様の計画までもが挫折してしまうように思われることもあるかも知れませんが、主のご計画の確かさと、守りへの信頼、そしてご計画を勧める主の強い御心を疑わずに進みましょう。

①神のみこころは？（信仰のあり方、希望の約束、愛の満ちしなど）

②どんな思いになりましたか？（感情や願いなど）

③生き方にどう適用しますか？（あなたのどの部分を主は扱おうとしておられますか）

④この世にあって何を実践しますか？

